

---

# 「隼」異世界飛行記

沖田五十六

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「隼」異世界飛行記

### 【ノード】

Z0832Z

### 【作者名】

沖田五十六

### 【あらすじ】

1945年4月、大日本帝国陸軍少年兵の井上翼は、特攻作戦「菊水作戦」で、一式戦闘機三型甲で特攻する事になっていた。が、敵襲を受け雷雲に突つ込み見たことも無い空を飛んでいた。

## 一話 「雷鳴」

1945年4月、沖縄周辺のアメリカ艦隊に対して特攻作戦が行われていた。後の世で「菊水作戦」と呼ばれるものである。

九州のある飛行場の滑走路（滑走路とあっても、ただ整地された地面）に、一式戦闘機三型甲 通称「隼」が暖機運転をしていた。その隼に駆け寄る1人の少年兵がいた。

「整備員さん！機体の調子はどうですか！？」

エンジン音が轟く中、少年兵

井上翼いのうえつばさきが大声で言つた。

「エンジンの調子は良さそうです！後はあなたの腕次第です！」

整備員の一人が答えて、微笑んだ。

「分かりました！最期まで有り難いります！」

翼がそう言い、操縦席に乗り込んだ。そつ、この少年兵は今から特攻に向かうのである。この1式戦闘機の他にも、3機の1式戦闘機が暖機運転をしている。どの機体の下にも、250kg爆弾を抱えている。

操縦席に乗り込んだ翼は、無線機の電源を入れた。

（井上、準備できたか。出発するぞ。）

同世代の知り合いの声が聞こえた。

「分かつた。靖国で会おう。」

無線の電源を切つて、エンジン出力を上げた。

「コンターク！」

英語が訛つた言葉を言って機体を発進させた。他の機体も続いて発進して行き、地上では多くの人が日の丸旗を振つて見送つた。今日の天気は晴れである。

数十分後、眼下は既に海であり、いつ敵襲を受けるか分からない空域となつた。翼は無線の電源を入れた。

「敵の空母までどのくらいになつたかな・・・」

（さあな。わからんねえけど、必ず近づいているぞ。その時になつたら、必ず沈めてやる！）

「・・・」

翼は、ため息をはいた。どうせ死ぬなら親しい女性でも作つておけばよかつた、と思った。

その時、首筋に殺氣を感じた。翼は辺りを見回す。すると、太陽を背に、数機の戦闘機が突っ込んできていた。

「上から敵機だ！散開しろ！」

無線機に怒鳴つたが、既に遅かつた。1機の隼が機銃弾を浴び落ち

て行つた。

(谷の機体だ！畜生！)

知り合いの声が聞こえたが、それを聞いている余裕は無かつた。後ろに2機が付き、曳光弾が主翼にかすつっていた。まずいと思い、辺りを見回した。とちようどそこに雷雲らしき黒い雲があつた。

「おーーあの雷雲に突っ込むぞー！」

無線機に怒鳴つた。が、返事が帰つてくる事は無かつた。

「くそ！俺一人かよ・・・・。」

歯がぎきちぎりと鳴つた。が、今は生き残る事が先決である。機首を雷雲に向けた。敵の戦闘機も追つてきたが、すぐに退避した。雷雲に突っ込むのは危険だからである。

雷雲に突っ込み、視界が利かなくなつた。所々で稲光がする中、隼は飛行していた。

「くそ・・・なぜ助けられなかつた！俺つて奴は・・・。」

そう呟いたとき、田の前が真つ白になつた。正確に言えば、雷が隼に直撃した。

その光が消えた後、そこに隼と翼は「消滅」した。彼がその後何処に行つたか、後世では「戦死」したことになっている。

## 一話 「雷鳴」（後書き）

ご感想をお願いします。また、この小説は4日に1回の割合で更新していくと思います。

### 登場人物紹介

**井上翼** (いのうえつばさ) 大日本帝国少年兵（18歳）一式戦闘機に乗り、敵艦に向かって飛んでいたところを攻撃され、雷雲に逃げ込み異世界へ、性格は優しいが、大切な者や親しい人を攻撃されると性格が一変、攻撃した相手を倒すまで戦い続ける。志は不殺(じふさず)であり、性格が変わつても相手を殺す事は無い。

## 「異世界」

「う・・・」

エンジン音がする中、翼は田を覚ました。

(何があつたんだ・・・。)

少しボーとする頭で考えた。

(そうだつた。雷に打たれたんだ・・・) (せっ)

翼は操縦席の外を見た。そこには、青い海ではなく青々とした森が広がっており、地平線には山脈らしき山々が連なっていた。

(ー? いつこわづまで海上を飛んでいたのにー?)

少し混乱しながら、磁気羅針盤（機首が向いている方向を記す羅針盤）を見た。南西方向を向いている。

(とつあえず、基地の方向に行つてみるか・・・。)

翼は機首を北東に向け、エンジン出力を巡航速力まで下げた。

約300km地点まで来たが、基地どころか、海の姿も無かつた。

(おかしい。基地はここにある筈だけど・・・)

何処を見回しても、森しかない。

(とにかく、降りれるとこを探さないと……)

すると機首の方向に、小さな村のような集落と、降りるのには十分な広さの平原があった。

(よし。とりあえずあそこに降りよ。)

やつ思い、隼を降下させていった。

同時に、翼の見つけた村、名をスピット村と言った。そこには西洋風の家が立ち並び、教会もある。そのうちの一軒は、治安維持のために騎士が数名駐屯していた。その家の入り口に複数の子供が立っていた。みんな、震えていた。

「サラお姉ちゃん居る?」

子供の一人が家に向かって言った。すると、ドアが開き金髪の少女が出てきた。

「どうしたの?みんな怖がってるみたいだけど……」

金髪の少女 サラは子供達に聞いた。

「うん。村の近くの原っぱで遊んでたら、龍の呻き声がしたんだ。時間が経つて行くにつれて声が大きくなつて、空を見たらドラゴンが飛んで行ったんだよ。みんな怖くなつてここに来たんだ。」

「ドラゴンですって!?

この世界では、ドラゴンやグリフォン等の幻獣が生息している。ただし、その多くは町には下りてこない。

「分かつたわ。すぐやつけて来るから、安心して。」

サラはそう言って家中に入り、壁にかけてあつた両刃の片手剣を手にした。

「そのドラゴンって何処に居るの？」

サラが子供に聞いた。

「東の原っぱに降りたのを見たよ。」

サラはそれを聞いて、東の草原に走った。その後を子供達が遅れながらもついていった。

一方、隼を草原に着陸させた翼は、操縦席の後ろを探っていた。

「確かここに・・・あつた。」

翼が取り出したのは、大日本帝国正式小銃三八式歩兵銃（三十年式銃剣装着済み）だった。それと、30発ほどの弾丸も取り出した。

翼は操縦席から出て、主翼に座った。三八式歩兵銃に弾丸を装填しつつ、周りを見回した。どう見ても日本に、特に九州南部に生えているような木が無いのである。上空から見た村は、木に遮られて屋根しか見えない。

(とりあえず、あの村に行つてみるか……)

その時、後ろの方から足音がして振り返った。すると、何人かの子供と剣を構えている金髪の少女が居た。

(金髪・・アメリカ人か!?)

そう思つて、三八式歩兵銃を構えた。

「・・あなたは何者なの?」

金髪の少女が言つてきた。アメリカ人も喋れるのかと思ったが、まづこここの場所を聞くのが先決だと思つた。

「一つ聞きたいんだが、ここは何処だ? 少なくとも日本では無いようだけど。」

「二ホン? そんな国知らないわよ。ここは、マリーン王國のスピット村よ。それより、そのドラゴンは何? 見た限りは生き物では無いよね。」

金髪の少女が、隼を指差して言つた。翼は三八式小銃を下ろした。

「ドラゴン? ああ、こいつの事か。こいつは大日本帝国陸軍の1式戦闘機三型甲「隼」だ。飛行機だよ。」

すると少女は、わけが分からぬといつ顔になつた。

「ダイ二ホン帝国? イッシキセントウキ? ヒコウキ? 何それ……

「

何だこいつ、飛行機も知らないのか?と思った。しかも、日本も知らないのである。考えられるとしたら、まだ未開の地に住む原住民か、日本が無い世界いわゆる異世界つて奴か、アメリカ軍による錯乱か。前者は少女の服から無いとして、後者はそんな暇があるなら、日本に侵攻するはずだから無い。といつ事は・・・

「イリはまさか・・・・異世界なのか?」

「は? 異世界つて、何言つてゐの? そんなんある筈無いでしょ。」

少女が否定してきたが、そのまさかである。

「セリの・・えーと、名前は?」

とつあえず、名前を聞くだけ聞いたと思ひ、少女に聞いた。

「相手に名前を聞く前に、自分から名乗るのが礼儀よ。」

「あ、ごめん。俺の名前は井上翼。翼つて呼んでくれ。」

「サラよ。サラ・ラバウル。」

隼の主翼から下りて、サラの前に立つた。

「まず、あなたの正体を教えて。何処から来たのか、何しに来たのかを。」

「ああ。まず、俺は大日本帝国陸軍神風特別攻撃隊の1人だ、つて

言つてもわからないよな・・・」

翼はまず、近代日本（明治元年～昭和20年）の歴史を話し、元の世界といひの世界は別の物といつ事を話した。

「・・・簡単に言えば、俺はその異世界の戦争で、この飛行機で敵の軍艦を攻撃、沈めようとしていたんだ。それに失敗して雷雲に入つたら雷に打たれて、気付いたらここに居たんだ。」

「・・・あなた、頭大丈夫なの？まず、この金属の塊が飛ぶわけ無いでしょ。飛ばせるものなら飛ばしてみなさいよ。」

その時、翼は頭にカチンと来た。

「分かつたよ。飛ばしてやるよ。よく見とけ。」

そういうと、操縦席の後ろに歩兵銃わしまつて、エンジンの電源スイッチを入れた。この隼には、セルモーターが付いており、クラシクを回さなくてもエンジンが付いた。

「サラ！危ないから、機体から離れる！」

翼はそう叫んで風防を閉めた。

「本当に飛ばせるのかしら。」

サラは、前にある鉄の塊、ヒロウキといひらしいが、飛べないと思っていた。さつきから風車のよつな物が回つてゐるけど、全然動いてないからである。しかし、その考えはすぐに消えた。鉄の塊が動

き始めたのである。そして加速して行き、後ろ側が浮き始めた。そう思っていたら、足らしき物も地面から離れ、本当に空を飛んだのである。

「嘘……。鉄の塊が空を飛ぶなんて……。」

サラは唖然とした。しかも、自分の知っている中では一番速いのである。その後、しばらくしてヒロウキが降りて来た。サラたちの前で停止したヒロウキに付いている窓が開き、翼が出てきた。

「どうだ？ これで俺が異世界出身ってことが分かつた？ ？」

「……やうみたいね……。認めるわ。」

「じゃあ、改めて。俺は井上翼だ。」

翼が手を出した。

「私はサラ・ラバウルよ。」

サラはその手を握った。

この出会いが、未来を変えることにも知らず……。

## 「異世界」（後書き）

ご意見、感想をお願いします。

### キャラクター紹介

サラ・ラバウル 通称 サラ

翼が見つけた村の守備（警察）の騎士。剣や銃の腕はピカ一。ただし、家事その他は一切いない。性格は、素直になれない。金髪の16歳。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0832n/>

「隼」異世界飛行記

2010年10月10日16時53分発行